非読書のすすめ？

佐藤　邦夫

新聞や雑誌を見ていると、ときどき寺田寅彦のことが載っています。「若い頃に寅彦の随筆を読んで感動し、それ以来のファンだ」というような記事です。それを読みながら「また私と同じような人だ、さすがに寅彦先生を慕う人は多いのだなあ！」と思っています。

ところが、ある小冊子をぱらぱらとめくっていたら、とんでもない文章に出会い驚きました。著名な方が寅彦先生のことを否定されているのです。世の中にはいろんな考えや価値観を持った人がいるものです。こういうのもあるんだ、という事例に紹介したいと思います。

その小冊子は岩波書店が読者に無料で配布したもので、特別版『読書のすすめ』‐読者が選んだ〈私の好きな岩波文庫１００〉‐（二〇〇三年）です。カン尚中氏・齋藤孝氏・香山リカ氏ら十名の識者の岩波文庫に関するエッセイを集めています。少し長いのですが引用してみます。

非〈読書のすすめ〉　　立花　隆

「百冊リスト」に目を通して、第一に思ったことは、中学・高校生は、こんなリストを気にせずに（参考にするのはよい）、自分の読むものを選ぶのがよいということだ。

（中略）老人が、「若い頃に読んで感銘を受けた」ということで、「若い人にすすめたい」とする本は、自分の経験からいって、アナクロでいただけないものが多い。（中略）当たり外れからいうと、当たり二割、まあまあ四割、外れ三割くらいだ。

だいたい、老人が「若い頃」に読んで感銘を受けた本というのは、「半世紀も前の若い人」が感銘を受けた本ということで、いまの若い人が同じものを読んで感銘を受ける確率はかなり低い。（中略）

それに、〈私の好きな岩波文庫〉と銘打たれているものの、その人が、本当にその本を「岩波文庫」で読んだのかどうか疑問に思うものが少なくない。（中略）

『ドン・キホーテ』の要約本、物語形式の書きかえ本のたぐいを読んだ人は相当いるだろうが、オリジナルテキストを全訳した岩波文庫で全六冊を読んだ人がそんなにいるとはとても思えない（長ったらしくて、退くつで、たいていの人はいやになるはず）。『寺田寅彦随筆集（全五冊）』にしたってそうだろう。教科書、あるいは何かのアンソロジー的編集本で、随筆の数編を読んだ人はかなりいるだろうが、全五冊読んだ人なんてほとんどいないだろうし、またそんな

ことは内容的におすすめできない（サイエンスとして正しくない、あるいは足りないものがかなりある）。（後略）

という記述でした（傍点筆者）。岩波文庫編集部はこんな文章をよく載せたものです。

立花氏は誤解しているようです。「全五冊読んだ人なんてほとんどいないだろう」と書いていますが、これなど筆者は「ええっ？」と思いました。そこで、岩波書店に『寺田寅彦随筆集』の発行部数を尋ねたところ、お答えは「第一巻が十数万部、巻数本の傾向で第五巻がその約半分。」これだけ多くの読者がいるのです。この事実をご存じないとは、立花氏にしては迂闊だった（？）と思われます。

それから「内容的におすすめできない（サイエンスとして正しくない、あるいは足りないものがかなりある）」と指摘されたのですが、氏は寅彦随筆をよく読んだことがないようです。実に残念に思います。

随筆は科学論文ではないのに、妙にむきになられていると思います。氏にそう思わせるようなことが過去にあったのでしょう。たぶん、学生時代かに当時の物理の最先端におられた科学者が、寺田寅彦の評判を聞いてやっかみから〝時代遅れの日常身辺の科学〟と喧伝したのかも知れないと今は推測しています。なにしろ、学生時代は影響を受けやすいものですから。

たちばな・たかし氏は一九四〇年生まれ、東大・仏文学科卒の著名な評論家、著書に『田中角栄研究』『宇宙からの帰還』『脳死』などがあります。立花氏を有名にしたのは、あの田中角栄首相を疑惑追及で退陣に追い込んだこととされているようです。これがあったため、マスコミや有名人などに〝コワモテ〟になったのでしょうか？　著書も多数ありますし、最近ではＮＨＫ番組に出て医療の最先端に関するレポートをやられてもいます。

立花氏は東大を出たくらいですから頭はよく、理化学にも明るい稀有な方ですが、筆者は彼にいい感じを持っていません。何故なら筆者は新潟の旧３区（〝角さん〟の選挙区）の生まれです。郷里では〝角さん〟が亡くなって久しいのに今でも親近感を持って「こんな田舎でも道が良くなって便利な生活が出来るのは、み～んな〝角さん〟のおかげだよ！」と言っているからです。（筆者は静岡にもう四十余年、すっかり静岡人なのですが…。）

しかし、少し冷静になって考えてみると、寅彦先生に関しても〝角さん〟に関しても、立花氏は何かの誤解からそう思い込んだのではないでしょうか？『寺田寅彦全集』の文学篇や科学篇を読まれたなら、そうは考えない筈です。〝角さん〟は小学校しか出ていませんでした。人間は神様ではないので、いろいろ間違えることがあるのでしょう。

最近はそんな風に考えられるようになりました。

（二〇一一・二・三）